

# 運用力と文法力を育む英語授業

## — コミュニカティブ教授法とデータ駆動型学習 —

西垣知佳子<sup>1)</sup> 中條清美<sup>2)</sup> 小山義徳<sup>1)</sup>  
神谷 昇<sup>1)</sup> 安部朋世<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>千葉大学・教育学部 <sup>2)</sup>日本大学・生産工学部

### English Lesson to Enhance Language Performance and Competence — Communicative Language Learning and Data-Driven Learning —

NISHIGAKI Chikako<sup>1)</sup> CHUJO Kiyomi<sup>2)</sup> OYAMA Yoshinori<sup>1)</sup>  
KAMIYA Noboru<sup>1)</sup> ABE Tomoyo<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup>Faculty of Education, Chiba University <sup>2)</sup>College of Industrial Technology, Nihon University

1990年代以降、日本の英語教育はコミュニケーション能力の育成を目指し変革を進めている。文部科学省は2015年8月に「英語教育の抜本的強化のイメージ」を公表したが、それを見ると今後ますますコミュニケーション重視の路線が強化されていくことがわかる。一方で、コミュニケーション重視の英語授業では文法能力が育ちにくく、学習者の文法力に問題が見られ、それゆえ文法指導にも力をいれるべきだという議論もある。そうした英語教育の現状にあって本研究では、文法能力と文法指導に関する理論的背景を議論し、そのうえで確かな文法能力を育む英語指導の手法として、コミュニケーション重視の英語授業にデータ駆動型学習を導入する方法を提案する。さらにデータ駆動型学習を通してこれまでに確認した指導効果と、データ駆動型学習に関する今後の研究課題について論じる。

キーワード：データ駆動型学習 DDL 文法指導 気づき

#### 1. 研究の背景と目的

日本の英語教育は、実際の場面で使えるコミュニケーション能力の育成を目指し変革を進めている。日本において初めてコミュニケーション重視の方針が鮮明に打ち出されたのは1989年告示の学習指導要領であった。以来、日本の英語教授法の主流は、文法解説と訳読を中心とする伝統的教授法から、コミュニケーションを重視するコミュニカティブ教授法 (Communicative Language Teaching) へと移行してきている。

文部科学省が公表した「英語教育の抜本的強化のイメージ」(2015年8月)によると、次期学習指導要領では外国語活動の開始が小学校3年生に引き下げられる予定で、英語教育の早期化が進む。同時に、小中高の英語教育は「大学や海外、社会で英語力を伸ばす基盤を確実に育成すること」を目指して進み、それは「成熟社会にふさわしいわが国の価値を海外展開したり、厳しい交渉を勝ち抜く人材の育成」へと繋がっていく。公表されたイメージ図を見ると、日本の英語教育では、今後ますますコミュニケーション能力の獲得を目指して、コミュニカティブな授業が推奨されることがわかる。

コミュニカティブ教授法の主な特徴として、1) 言葉を使う経験を通して言葉を習得する、2) 「正確さ」(accuracy) よりも「流暢さ」(fluency) を大切にする、3) 異なるスキルを統合してコミュニケーションを図る、

4) インタラクションのなかで言語習得を目指す、等の点が挙げられる(米山, 2011; 白畑・富田・村野井・若林, 2009)。その結果、「コミュニケーション活動は、読解や文法指導の時間を削っても取り入れるだけの価値があります」(望月, 2014)とも言われ、コミュニケーション活動が英語授業の中心的役割を果たしていると言える。

一方で、コミュニカティブ教授法では、「文法能力が育ちづらい」という指摘がある(長谷川(編), 2015; 鈴木・白畑, 2012)。その結果、「大学の英語授業の定番は中学の復習、英語の講義でbe動詞の復習」という現実も突き付けられている(日本経済新聞 2015/7/22)。

以上の日本の英語教育の現状を踏まえ、本論文の目的は、「コミュニケーション能力の育成を中心に据えた英語授業の中で、確かな英文法能力を育むための文法指導の方法」について考察することである。

#### 2. 文法指導と文法能力に関する理論的背景

本節では文法指導と文法能力に関する理論的背景を論じる。これは、コミュニケーション重視の英語授業の中で、英文法はどのように指導され、どのように学ばれることが適切で効果的かという点を議論する際の基盤となるものである。

##### 2.1 文法の3要素と文法指導

Larsen-Freeman (2014) は、文法の3つの要素を円グラフで示した(図1)。英語指導にあてはめると、図

1のform（形式）は発音，語彙，文法，スペリング等，meaning（意味）は伝える内容，use（使用）はどのような場面で，いつ，何のためにそれを使うかということである。この3要素は密接に関連し，ひとつでも欠けると実際の運用場面では役に立たない。以上を踏まえると，文法指導はこれら3要素のネットワークを学習者の頭の中に構築することであると言える。

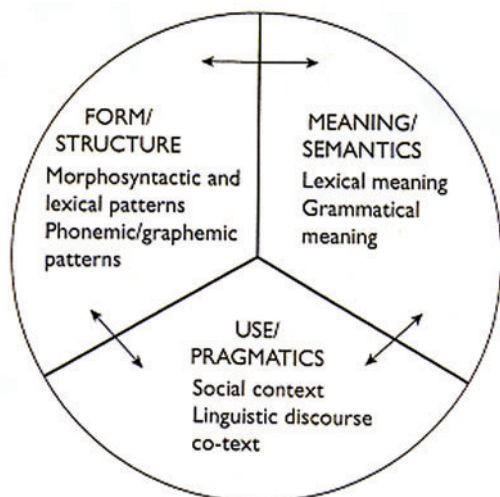


図1 文法の3要素

Larsen-Freeman (2014, p.258) より

ところが伝統的な指導では「形式」の育成に重きが置かれ，「使用」にはほとんど注意が向けられなかった。そのため，入試問題に正解できても，実際の場面では英語を使えないという状況が顕著で，批判的となってきた。それに対して，コミュニカティブ教授法は「習うより慣れる」の方式で，「意味」「使用」に重きを置き，「形式」の比重は少ない。その結果，学習者が産出する英語の正確さや形式に対する知識不足が問題とされるようになった。本来は意味あるコンテクスト（場面・状況）の中で伝えたい意味・内容を大切にしつつ，学習者の注意を言語形式にも向けさせられるような，「意味」「形式」「使用」の3要素を結びつけた文法指導が望まれる。

## 2.2 明示的知識と暗示的知識

言語知識 (language knowledge) には，暗示的知識 (implicit knowledge) と，明示的知識 (explicit knowledge) があるとされる。暗示的知識は，言葉に接する経験をとおして徐々に身についた直感的な知識である。日本人でいうと，母語である日本語の基盤にあるもので，言葉で説明することが困難な知識である。

一方，暗示的知識と対比されるのが明示的知識で，それは意識的に利用できる言語知識であり，言葉の仕組みや意味を自分の言葉で説明できる。すなわちコミュニカティブ教授法が育むのは暗示的知識であり，伝統的教授法が育てるのは意識的な文法理解と練習を伴う明示的知識と言える。

白畑 (2015, p.vi) は，「外国語という環境で英語などの外国語を学習する場合，『目や耳から入る言語インプットだけで自然に身につけていく文法規則』というも

のはほとんど存在しない」として，明示的知識の獲得の必要性を述べている。また長谷川（編）(2015) は「英語を正確に理解し使用するとき利用できて，間違った時に自ら訂正する際のよりどころ」として明示的知識が必要であると述べている。さらにメタ分析を行った Norris and Ortega (2000) は，250のSLA研究のうち，基準を満たす49の実証研究を効果量に基づいて分析し，明示的指導が暗示的指導より有効であることを検証した。

以上を踏まえると，英語教育の一義的な目的はコミュニケーション能力育成であるものの，英語が外国語であるために十分な英語のインプットのない日本の英語学習環境では，英文法の明示的知識は必要であり，それはコミュニケーション能力の育成にも有効であると考えられる。

## 2.3 文法能力の習得モデル

英文法指導を議論するにあたり，その基盤となる「教室における第二言語の語彙・文法習得プロセスモデル」を，Ellis (1998), Gass (1988), 和泉 (2009), Kondo and Shirahata (2015), 村野井 (2006) で提案されている第二言語習得モデル等を参考に作成した (図2)。図2のモデルは，日本の教室環境における語彙・文法指導に焦点をあて，その習得プロセスを仮定したものである。語彙・文法の習得プロセスと並行して，学習者の中でおこる認知活動，教室における学習活動，標準的な授業展開の枠組みを並べて示した。これにより文法学習と指導についての議論が容易になると考える。

詳しく見ると，図2の左上から右下にのびる矢印は語彙・文法能力の習得プロセスを示している。その左側には語彙や文法を習得する際に学習者の中でおこる「認知活動」，右側には文法学習に関わる授業中の「学習活動」を示した。実際の授業の流れに沿って図2を見ると，はじめに「インプット」(input) があり，その日の学習目標である言語材料が導入される。その際教師は，学習目標の語彙や文法項目を，それらがどのような場面で，どのような時に，どのような目的で使われるかを学習者が推測しやすいように，コンテクストとともに導入する。例えば，make+O+Cの構文が目標言語材料であるとすると，写真やイラスト，教師の表情やジェスチャー等の補助情報を利用しながら，Yesterday was my brother's birthday. I made a birthday cake for him. The cake made him happy. というような例文を多数，口頭で提示する。生徒の注意が英文中で繰り返し使われている文のパターンに向かうと「気づき」(noticing) が起こる。次の「理解」(comprehension) に進むには，その前提条件として気づきが起こらなければならないことから，気づきは理解の必要条件といえる。

「理解」は学習目標である文法項目の形式・意味・使用のすべてあるいは一部を把握する段階で，前述の暗示的知識に対して暗示的理解，明示的知識に対して明示的理解がある。暗示的理解は英語との接触をとおして引き出される，いわゆる小学校の「外国語活動」で期待される文法説明を伴わない理解である。一方，明示的理解は言葉による説明をとおして得られる理解で，中学校，高等学校の「外国語科」で期待される英文法学習である。

「インテイク」(intake) は「内在化」と訳される。気

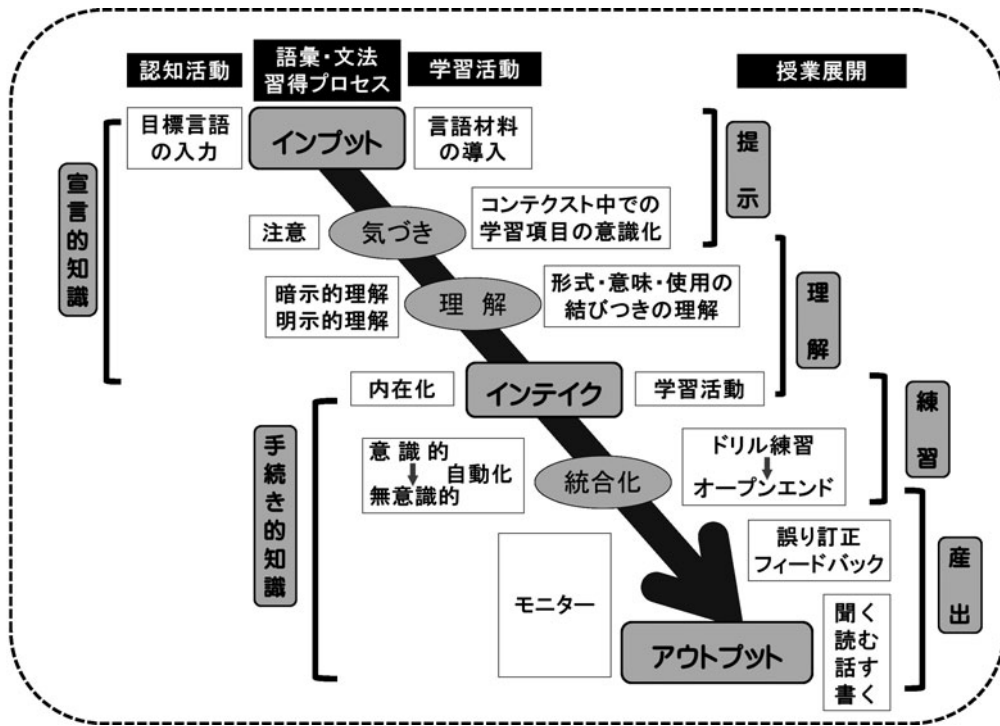


図2 教室における第二言語の語彙・文法習得プロセス

気づき、理解した学習項目を学習者が自身の「既存の知識体系の中に取り込む」ことである。「統合化」(integration)は、取り入れられ、内在化された知識がさらに強く学習者の知識体系の中に組み込まれる過程である。統合化は学習目標である語彙や文法項目を繰り返し使うことで進む。教室での繰り返しは、パターンプラクティスのような機械的ドリル練習から、習得レベルが高くなると自由度の高いオープンエンドの活動へと変化していく。練習と活動を重ねると、学習項目を無意識に流暢に使えるようになり、「自動化」(automatization)される。

また学習者は習得した文法知識を使って、自分が産出する英文を意識的に調整したり、制御したり、モニターできるようになる。授業では、教師が学習者の誤りを訂正したり、褒めたりしてフィードバックを与える。そして習得した学習項目を4技能において活用すると「アウトプット」(output)にいたり、アウトプットを行うことでさらに統合化が進む。

図2におけるアウトプットは、話す・書く活動のみならず、聞く・読む活動も含めた「語彙・文法知識の4技能への適用」として捉える。以上のプロセスは直線的に進むわけではない。進んでは戻り、戻っては進みと、前進と後退を繰り返しながら進んでいく。

図2において語彙・文法知識がインテイクに留まっていると、問題集は解けるが実際の場面では使えない。そうした知識は宣言的知識の段階に留まっていると考えられる。そして練習と産出活動を繰り返すことで、語彙や英文法が実際のコミュニケーションで使えるようになると、その知識は手続き的知識に変化したと考えられる。

コミュニケーション能力が求められる現代社会では、語彙・文法知識をインテイクの段階で留めることなく、それを4技能に適用して統合的に使える能力へと高める必要がある。

さらに図2の語彙・文法習得プロセスが推進されるには学習者の「やる気」が必須であることも忘れてはならない。「やる気」は自動車のエンジンのようなもので、英語に限らず、学習行動をおこすための必須の要因である。それは、学習指導要領でいうところの「英語を使おうとする積極的な態度」と関係している。どんなに良い教材があっても、どんなに素晴らしい指導者がいても、学習者にやる気と英語を使おうとする態度がなければ学びは起こらず、スキルの習得も望めない。

日常生活で英語を必要としない日本の英語学習環境では、入学試験や学業成績という目標を除くと、生徒の英語学習に対するニーズは乏しい。そのため、英語教師は常に、英語学習に対する生徒のやる気を引き出し、さらにそれを継続させる工夫をする必要がある。

## 2.4 英語授業での文法指導のプロセス

日本の英語授業はいわゆるPPPの順番で展開されることが多い。PPPとはすなわち、Presentation「提示」→Practice「練習」→Production「産出」である。さらにこのプロセスに、学習項目の「理解」(Comprehension)の段階を加えてPCPPと言うこともある(村野井, 2006)。図2では、語彙・文法学習の認知活動のプロセスにPCPPの授業展開パターンを対応させて語彙・文法指導とPCPPの関連を右端に示した。

図2のモデルを仮定することは、語彙や文法指導について議論するうえで有用である。例えば、ある文法項目を「わからない」というときに、それが、そもそも文法規則に意識が向いていないことに起因するのか、規則そのものを理解していないことに起因するのかということ推定できる。また、「使えない」というときに、文法規則が知識としてインテイクされていないのか、知識はあるがそれが自動化されていないために、アウトプット

に時間がかかるのかということ推測できる。

さらに、図2のモデルを使い、語彙・文法習得のプロセス、認知活動、学習活動、授業の展開を可視化して関連させることで、文法習得がうまくいかない場合に、どの段階で習得が停滞しているのか、さらに、どのような文法指導がどの段階において、どのような効果をもたらすのかということ推測し、議論することができる。

### 3. データ駆動型の文法学習

英語教育におけるコミュニケーション重視の風潮の中で、文法指導に対する風当たりは強い。例えば、「英文法を勉強しても英語を話せるようにならない」「文法を間違えるといけないと思うと英語が話せない」という批判があり、文法学習が原因でコミュニケーション力が育たない、というような誤解もある。それに対して鳥飼(2011)は「文法指導そのものが悪いのではなく、これまでのやり方が悪かった」と指摘する。

文法力は英語力育成の基盤として不可欠である。しかし、教師が文法規則を解説し、学習者はその説明を聞いて理解するという従来の指導を繰り返すことはできない。今までと同じ指導を繰り返しては、過去に受けたと同じ批判を再び受けることになるからである。

本研究グループでは、教師が説明して教え込む伝統的な文法学習からの脱却を図り、これまでと異なる新しい発想の文法指導の方法として、データ駆動型学習(Data-Driven Learning: 以下、DDL)を提案して、その効果を実証的に検証してきた。本節では、はじめにDDLとはどのような指導法であるのか議論し、続いて、実際の英語授業にどのようにして導入するのか、その具体的方法について論じる。

#### 3.1 データ駆動型学習：DDL

コーパス言語学の発展とともに、コーパス(言語データ)を言語研究のみならず、言語教育にも利用しようという試みがなされるようになり、DDLがJohns(1991)によって提唱された。すなわち、DDLはコーパス言語

学的手法を言語教育に採用した例である。

DDLではパソコンと検索ソフトを使って、コーパス検索を行いながら学習を進める。具体的には、検索用のコーパスからターゲット語を検索すると、ターゲット語を含む英文用例がモニターに表示される。さらに、条件を指定してソートすると、ターゲット語を中心にして、ターゲット語の前後に現れる単語や表現を見やすく並べて観察することができる。

例えば、図3はearlyをターゲット語として、その左側の語を1番目に、右側の語を2番目という条件にしてソートした結果である。用例を見ると、earlyを中心としてearlyの直前(左側)と直後(右側)にどのような語彙や表現が続くかがわかる。earlyがquitやstart等の動詞の後に続いて副詞として働く場合や名詞の直前に来てearly 1950sやearly morningのように形容詞として働く場合等の用例を観察できる。

図3のようにターゲット語を画面中央に置いて前後の文脈とともに示す表示形式をKWIC(Key Word in Context)と言う。また画面上の用例はコンコードダンスラインと呼ばれる。DDL検索の結果は、英語の使い方を示す事例そのものであり、モニター上に現れる多様な用例を観察して、学習者自身が語法や文法規則を自分の力で発見して学ぶ帰納的な学習方法である。

DDLの特徴を英語教育学および第二言語習得研究の観点に照らし合わせて考察すると、DDLは英語習得の「正確さ」と「流暢さ」のうち正確さを高める。久保田(2011)によると、DDLは英語の構造や形式についての知識を身に付け、それを正確に操作できるようになることを目標とする「形式偏重型の指導」の範疇に入る。

コミュニケーション教授法が流暢さを高めるのに対し、DDLは正確さを高めることから、コミュニケーション教授法とDDLを組み合わせることで、流暢さと正確さをバランス良く育成する英語授業を組み立てることが期待できる。

さらに帰納的に学ぶDDLは「学習者中心の学習法である」「task-basedアプローチである」「自立した学習者を育てる」「発見する行為が動機づけになる」等の効果も期待できるという(Braun, 2005; Huang, 2008)。

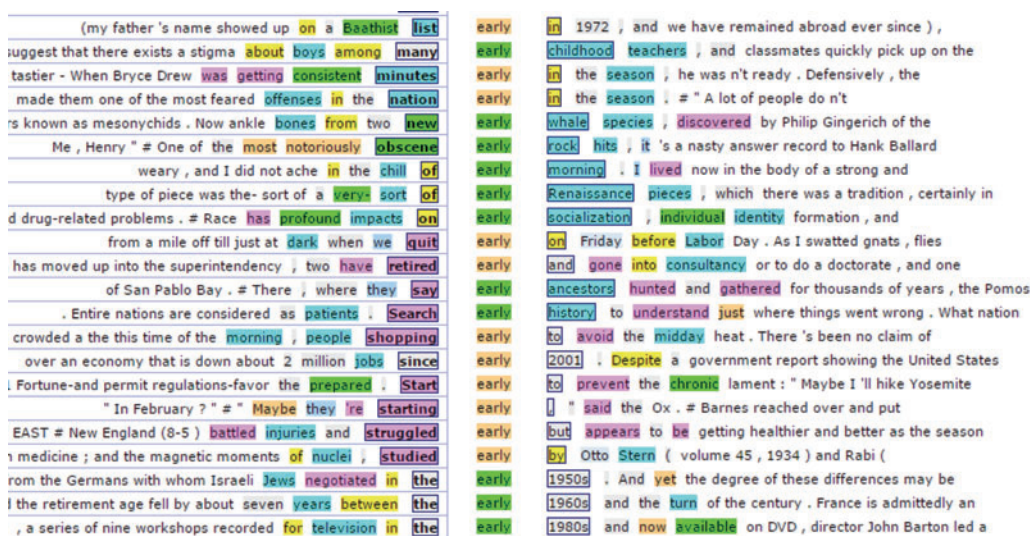


図3 ターゲット語の検索画面の例

### 3.2 日本におけるDDLの適用

DDLの醍醐味は、教科書では経験できないような、authenticで多様な言語データを、直接観察して学習できる点である。一方、DDLで利用するコーパスは、英語母語話者の英語を収集したauthenticなものであるために、コンコーダンスラインに現れる英文のレベルが高いという点も特徴である。そのためDDLは中・上級外国語学習者に適した学習方法と言われ、英語を外国語として学ぶ日本の学習者には英文レベルが高く、そのまま適用するのは困難であるという問題があった。

そこで、日本人の大学生初級者にDDLを適用させるために、中條・西垣・内堀（2007）では、英文に合わせて日本語訳を提示するパラレルコーパスを利用して、英理解の負荷を下げた。さらに、中條・内堀・西垣（2011）では、パソコン操作の煩雑さを解消するために、コンコーダンスラインを印刷したプリントを学習メディアとして利用した。そしてCALL形式のDDLと、印刷物を利用したDDLの効果を比較し、両者に差がないことも確認した（Chujo, Anthony, Oghigian & Uchibori, 2012）。

さらに中條・アントニ・内山・西垣（2013）はCALL利用のDDLの良さを高めるために、パソコン操作を簡素化したユーザーフレンドリーな検索機能付きの英字新聞コーパスWebParaNewsを公開した。Nishigaki and Chujo（2014）はWebParaNewsを使って、英語教員志望の大学生にDDLを行って発見学習の効果を検証した。なお、こうしたDDLの効果が高いことはメタ分析の結果からも検証されている（Mizumoto & Chujo, 2015）。

### 3.3 小中高生へのDDLの適用

DDLは、その効果が認められ、世界的に活用が広がっている。そうしたなか、本研究グループでは、日本の小中高生の英文法指導にDDLを適用したいと考えた。ただし小中高生へのDDL適用には、大学生に対する配慮よりもさらに丁寧な配慮が必要であった。以下では、DDLを日本の小中高生という入門期学習者に適用する際に生じた課題とそれに対して講じた対応策を論じ、独自に行ってきた小中高におけるDDL適用について述べる。

**課題1** コンコーダンスラインの英文は、日本の小中高生の英語力に対してレベルが高い（図3参照）。

➡学習者レベルにあった英文を集めたコーパスを利用した。

- ・日本・中国・韓国・台湾の中学・高校英語検定教科書コーパスを構築した（西垣・天野・吉森・中條, 2011）。
- ・短くて簡潔なセンテンスを集めたSCoRE（中條他, 2015）から初級レベルの英文を収集した。
- ・日本語対訳を付したパラレルコーパスを使用し、英理解の負担を減らした。

**課題2** 小中高生のような英語力が未発達な学習者では、文法規則発見が上手にできない。

- ➡学習者が言語規則の発見に集中できるようにした。
- ・コンコーダンスラインの英文を短くした。
  - ・未習語を使わないようにした。
  - ・コンコーダンスラインを学習者のレベルや活動に合わせて、5～20文程度に絞った。

・「気づき」を引き出すタスクを作成して、ワークシートにして配布した。

・コンコーダンスラインを見やすく提示するパラレルコーパス検索ソフトAntPConc（中條・アントニ・西垣・横田, 2014）を利用した。

**課題3** 授業でパソコンを使用できない。

➡コンコーダンスラインを印刷して配布した。

以上のような対応をするために活用したDDL教材の例を図4～図6に示した。

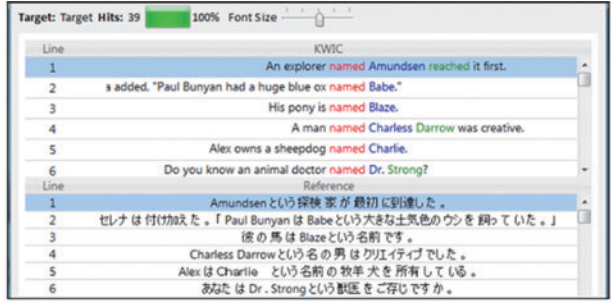


図4 AntPConc の画面例

リスト1 今までに習った make

1	Mami	made	a doll.	ママは人形を作った。
2	Our group	made	curry and rice.	私たちのグループはカレーライスを作った。
3	I will	make	a birthday cake for Yuki.	私はユキのために誕生日ケーキを作るつもりだ。
4	You will	make	friends soon.	あなたはすぐに友達を作るだろう。
5	Hollywood	makes	great movies.	ハリウッドは素晴らしい映画を作る。

リスト2 新しいタイプの make

6	The rain	made	everyone wet.	雨はみんなをずぶ濡れにした。
7	Those words	made	me happy.	あれらの言葉は私を幸せにした。
8	The news	made	Nancy sad.	その知らせはナンシーを悲しくした。
9	This work will	make	her busy.	この仕事は彼女を忙しくするだろう。
10	Tom always	makes	his teacher angry.	トムはいつも彼の先生を怒らせる。
11	Her song	makes	people happy.	彼女の歌は人々を幸せにする。

図5 印刷したコンコーダンスラインの例

1	英文を先生と一緒に読もう。 <input type="checkbox"/> 読みました		
2	リスト1の make の意味は何か。 _____		
3	リスト2を見てください。 ① make の日本語訳に下線を引こう。made/makes/makes の意味は何か。 ② 例にならって make/makes/ made の右側にくる語を○で囲もう。 ③ ○で囲んだ語に共通する特徴か。 ④ 例にならって、○で囲んだ語の隣の語やかたまりを□で囲もう。 ⑤ □はどんなことを表しているか考えよう。 ⑥ ○と□の関係を考えよう。		
	自分の意見	友達の見解	
	発見した数だけ塗ろう ☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆		
	まとめ		
	4		
	5		

図6 ワークシートの例

### 3.4 英語授業へのDDL導入

羽山 (2015) は、DDLが、伝統的に行われてきた教師主導型のPPP型授業から、学習者主導型の授業への転換のきっかけになると述べている。さらに、リメディアル教育の重要性が訴えられているなか、DDLのように学習者が自ら学ぶ意欲を持って、自力で学習を進めていく方法論を確立することは、非常に重要だと述べている。

今日の英語授業は、コミュニケーション型教授法を踏まえつつ、学習者が主役となるように授業を進めている。しかしながら、文法知識を獲得する「理解」の段階(図2参照)では、依然として教師が文法規則を解説して知識を伝達する従来型の、教師中心の演繹的学習方法がとられることが多い。そこで、コミュニケーション型授業にDDLを導入すると、学習者主体の語彙・文法規則の学びが加わる。さらに言語形式に注意が向きにくいというコミュニケーション型教授法の弱点を補完できる。表1は授業にDDLを組み入れた際の授業の流れの例を示している。

表1 PCPP型授業でのDDLの活用手順の例

導入	インタラクションを図りながら、場面の中でターゲット構文をたくさん聞かせる	
理解 DDL	1 発見活動	個別学習
	2 協同学習	ペアや班活動
	3 文法規則まとめ	クラス全体活動
練習	場面を伴ったドリル式の練習	
産出	4 技能の統合的な表現活動	

### 4. 検証されたDDLの効果

本研究グループでは、中学生を対象にPCPP型の授業にDDLの文法学習群(DDL群)と、教師の説明を聞く文法学習群(従来型群)を導入した場合の指導効果を比較した。その結果、指導1週間後の文法テストの得点はDDL群と従来型群で同じであったが、指導1か月後の定着テストではDDL群の得点が統計的にも有意に高かった。このことは繰り返し確認された。

また、未習文法項目の規則発見テストでは、DDL群が従来型群よりも、より緻密に言語規則を観察して記述した。以上の結果から、DDLは「英文法の明示的知識の獲得」「学習項目の記憶保持」「言語観察力の向上」に効果があることが確認された(西垣・横田・小山・神谷・中條, 2014; 西垣・小山・神谷・横田・西坂, 2015; 西垣・小山・神谷・尾崎・西坂・横田, 2015)。

さらに学習者がワークシートに記述した発見事項を調査した結果、学習者が英語の語順、単語の位置、修飾・被修飾の関係、冠詞の有無、単数・複数、主語の生物・無生物、品詞の違い等に気づいていたことが確認された。

また、学習者が日本語訳を利用して、英語と日本語の文法の違いに気づいていること、そうした違いに気づくことが英語の文法理解を深めていたことなどを確認した(西垣・横田・小山・神谷・中條, 2014; 西垣・尾崎・神谷・小山, 2015)。そしてこうした気づきが、小学校6年生でも起こっていたことも確認できた(西垣・大木・神谷・小山, 2015)。

### 5. まとめと今後の展望

本稿では、コミュニケーション重視の授業をととして学習者に暗示的に育った言語知識を明示化して定着させる手段としてDDLが有効であると考えた。そしてDDL導入について、理論的考察を加え、図2の文法習得モデルを仮に設定した。今後はこのモデルを基盤に据えて実証研究を行い、DDLによって引き出される学習効果や現象を理論と実践の両面から検証していきたい。

また教科書の英文法学習は单元ごとに独立していて、文法学習全体の道筋や文法項目間の系統性が把握しにくい。教科書によって学習順序等の扱いが異なる。そこで英文法学習に系統性を持たせ、文法学習の道筋を示すために「英文法学習系統表」を、主に生成文法の中の統語論の観点に基づき試作した(神谷・西垣・小山, 2016予定)。今後はこの「英文法学習系統表」を完成させ、英文法学習の系統性を可視化し、小中高の英文法学習を接続・連携させる手がかりにしたいと考える。

さらに次の点についても検証したいと考えている。

- ・DDLの効果が高い文法項目と低い文法項目は何か
- ・DDLは英語能力全体の何に効果があるか
- ・コミュニケーション型教授法のどのタイミングでDDLを取り入れると効果が高いか
- ・コミュニケーション活動とDDL活動のバランスをどのようにすると良いか
- ・DDLの発見内容と認知レベル・英語力レベルにはどのような関連があるのか
- ・長期的スパンでのDDL学習効果の観察
- ・日本語文法を活かした英文法指導の方法
- ・小学校外国語科を見据えてのDDLの適用方法

以上、本研究グループでは、DDLに関する基礎研究を継続するとともに、教材開発を進め、あらたに、英文法指導における日本語文法の活用についても検討したい。このように基礎研究、教材開発、実践研究を引き続き推進し、DDLの普及に努めたい。

### 謝 辞

本研究は科学研究費補助金基盤(C)(25370618)の支援を受けて行われました。ここに感謝申し上げます。

### 引用文献

Braun, S. (2005) From pedagogically relevant corpora to authentic language learning contents. *Recall*, 17 (1), 47-64.

Chujo, K., Anthony, L., Oghigian, K., Uchibori, A. (2012), Paper-based, computer-based, and combined data-driven learning using a web-based concordancer, *Language Education in Asia*, 3(2), 132-145.

中條清美, 西垣知佳子, 内堀朝子. (2007)「パラレルコーパスを利用した文法発見学習の試み」『日本大学生産工学部研究報告B』40, 33-46.

中條清美, 内堀朝子, 西垣知佳子. (2011)「日英パラレルコーパスを利用したペーパー版DDL教材の開発」

- 『日本大学生産工学部研究報告B』44, 33-46.
- 中條清美, アントニ・ローレンス, 内山将夫, 西垣知佳子. (2013)「WebParaNewsを利用したWeb版DDL教材の開発」『日本大学生産工学部研究報告B』46, 27-37.
- 中條清美, アントニ・ローレンス, 西垣知佳子, 横田賢司. (2014)「多言語検索ツールAntPConcのリメディアル文法指導における活用」『日本大学生産工学部研究報告B』47, 79-92.
- 中條清美, 若松弘子, 石井卓巳, 宇佐美裕子, 横田賢司, キャサリン・オヒガン, 西垣知佳子. (2015)「教育用例文コーパスSCoREの作成」『日本大学生産工学部研究報告B』48, 21-43.
- Ellis, R. (1998) Teaching and research: Options in grammar teaching. *TESOL Quarterly*, 32, 39-60.
- 長谷川信子編. (2015)『日本の英語教育の今, そして, これから』開拓社.
- 羽山恵. (2015)「コーパスと英語教授」『英語コーパス研究シリーズ コーパスと英語教育 第2巻』, 堀正弘, 赤野一郎 (監修), 投野由紀夫 (編), ひつじ書房, 43-72.
- Huang, L. S. (2008) "Using guided, corpus-aided discovery to generate active learning". *English Teaching Forum*, 46(4), 20-27.
- 和泉伸一. (2009)『フォーカス・オン・フォームを取り入れた新しい英語教育』大修館書店.
- Johns, T. (1991) From printout to handout: Grammar and vocabulary teaching in the context of data-driven learning. In T. Johns, & P. King (Eds.), Classroom concordance. *English Language Research Journal*, 4, 27-45.
- 神谷昇, 西垣知佳子, 小山義徳. (2016)「中学校における文法項目の系統化の試みー文法学習表の作成とDDL学習教材への適応」『千葉大学教育学部研究紀要』64 (予定).
- Kondo, T & Shirahata, T. (2015) The effect of explicit instruction on transitive and intransitive verb structures in L2 English classrooms. *ARELE*, 26, 93-108.
- 久保田章. (2011)「文法の学習と指導」, 望月昭彦 (編著)『改訂版 新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店, 208-220.
- Larsen-Freeman, D. (2014) Teaching grammar, in *Teaching english as a second or foreign language*, Celce-Murcia, M, Brinton, D, M. and Snow, M.A. (Eds), Cambridge: Cambridge University Press, 256-270.
- Gass, S. M. (1988) Integrating research areas: A framework for second language studies 1. *Applied Linguistics*, 9(2), 198-217.
- Mizumoto, A., & Chujo, K. (2015) A meta-analysis of data-driven learning approach in the Japanese EFL classroom. *English Corpus Studies*, 22, 1-18.
- 望月尚子. (2014)『「気づき」を起こすコミュニケーション活動を行うために』, 上智大学CLTプロジェクト (編),『コミュニケーション型英語教育を考える』アルク, 34-37.
- 文部科学省. (2015)「英語教育の抜本的強化のイメージ」教育課程企画特別部会資料 (8月5日) [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/\\_icsFiles/afieldfile/2015/08/06/1360750\\_2-2.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/053/siryo/_icsFiles/afieldfile/2015/08/06/1360750_2-2.pdf).
- 村野井仁. (2006)『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店.
- 日本経済新聞 (2015)「学びの現場から 中学の復習大学の『定番』」(2015/7/22).
- Nishigaki, C., & Chujo, K. (2014) L2 data-driven learning with a free web-based bilingual concordancer, *2014 conference proceedings, the twelfth annual Hawaii international conference on education*, 806-817.
- 西垣知佳子, 天野孝太郎, 吉森智大, 中條清美. (2011)「中高生のためのコンコーダンス・ラインを利用したデータ駆動型英語学習教材の開発の試み」『千葉大学教育学部研究紀要』59, 235-240.
- 西垣知佳子, 横田梓, 小山義徳, 神谷昇, 中條清美. (2014)「中学校英語授業における『言葉を観察する眼』を育てるデータ駆動型学習の実践ーペーパー版DDLからタブレット版DDLへの発展ー」『千葉大学教育学部研究紀要』63, 287-294.
- 西垣知佳子, 大木純一, 神谷昇, 小山義徳. (2015)「小学校における文法規則への気づきを引き出す指導ーDDLの外国語活動への導入ー」『第15回小学校英語教育学会広島大会要綱集』, 103.
- 西垣知佳子, 尾崎さおり, 神谷昇, 小山義徳. (2015)「英語の文法規則への気づきを引き出す発見学習ー中学校におけるDDLとコミュニケーション活動の融合ー」『第41回全国英語教育学会熊本研究大会発表予稿集』, 44-45.
- 西垣知佳子, 小山義徳, 神谷昇, 尾崎さおり, 西坂高志, 横田梓. (2015)「フォーカス・オン・フォームに取り入れるデータ駆動型学習の効果の検証」『英語授業研究学会紀要』24, 49-63.
- 西垣知佳子, 小山義徳, 神谷昇, 横田梓, 西坂高志. (2015)「データ駆動型学習とFocus on Formー中学生のための帰納的な語彙・文法学習の実践ー」『関東甲信越英語教育学会紀要』29, 113-126.
- Norris, J., & Ortega, L. (2000) Effectiveness of L2 instruction: A research synthesis and quantitative meta-analysis. *Language Learning*, 50, 417-528.
- 白畑知彦, 富田祐一, 村野井仁, 若林茂則. (2009)『改訂版 英語教育用語辞典』大修館書店.
- 白畑知彦. (2015)『英語指導における効果的な誤り訂正』大修館書店.
- 鈴木孝明・白畑知彦. (2012)『ことばの習得 母語獲得と第二言語習得』くろしお出版.
- 鳥飼玖美子. (2011)『国際共通語としての英語』講談社現代新書.
- 米山朝二. (2011)『新編 英語教育指導法事典』研究社.